武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節
聖霊の力
――使徒行伝第1、2、9、16、19、22章――

１９７４年６月２日
小池辰雄

終末的な危機　キリストの原始の力　無者即無限無量者　彼らみな聖霊に満たされ　「なんぞ、我を迫害するか」　我が選びの器　ペテロとピリポ　幕屋を皆さんが開けば　われ救われん為に何をなすべきか　我と父とは一つなり　「神―キリスト―我」の三重丸　御霊のバプテスマ　御霊の生命の歓喜の世界　聖霊の力　敵を愛せよ

【使徒1】

8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力(ちから)をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極(はて)にまで我が証人とならん』

【使徒2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2 烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止(とど)まる。4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣(の)べしむるままに異邦(ことくに)の言にて語りはじむ。……

17 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。

【使徒9】

15 主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16 我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』……

22 サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。……

32 ペテロはあまねく四方をめぐりてルダに住む聖徒の許(もと)にいたり、33 彼処(かしこ)にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床(とこ)に臥(ふ)し居るに遇う。34 斯てペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医(いや)したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。……

36 ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業(わざ)と施済(ほどこし)とをなせり。37 彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼(たかどの)に置く。38 ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処

に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。40ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。41ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。42この事ヨツパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。

【使徒16】

19然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』22群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、26俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』

【使徒19】

1斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて己に後れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7この人々は凡て十二人ほどなり。

【使徒22】

3『我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生まれしが、此の都にて育てられ、ガマリエルの足下にて先祖たちの律法の厳しき方に遵(したが)いて教えられ、今日の汝らのごとく神に対して熱心なる者なりき。4我この道を迫害し男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らしめしことは、5大祭司も凡ての長老も我に就きて証するなり。我は彼等より兄弟たちへの書を受けて、ダマスコに寓(やど)り居る者どもを縛り、エルサレムに曳き来りて罰を受けしめんとて彼処(かしこ)にゆけり。6往きてダマスコに近づきたるに、正午ごろ忽ち大なる光、天より出でて我を環(めぐ)り照せり。7その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞き、8「主よ、なんじは誰ぞ」と答えしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と言い給えり。

●終末的な危機

キリスト教の大事な日は、降誕節、十字架の金曜日、復活の日曜日それからペンテコステ、この四つあるわけです。我々キリスト教を受けている者にとっては、今日の

「ペンテコステ、聖霊降臨節」

というのが一番身近な大事な日なので、これをいい加減にしては我々の信仰は成り立たない。ところが、私が育ってきた無教会では、ペンテコステを特に覚えた集会はなかった。教会において果してどのようにしているかは知りませんけれども。私たちが歴史的なあるひとつの自覚を持っているのは、この日を特に一番焦点として覚えなければならないという、そこにあるわけです。そういう意味で、今日、皆さんはここに来られたわけです。まぁ、何はさておき、この日はとにかく守るという、それだけの覚悟を持っていていただきたい。

この頃、

「終末」

という言葉がはやっていますけれども――私は昔からもう「終末」のことは考えていたけれども――非常にこの世の中が、20世紀は終末的な危機に再会している。特に日本は精神的に非常に危ない。イデオロギーをただ排斥するのではないけれども、イデオロギーの超イデオロギーの世界、本当の人間ということ。

「人間性」

とさかんに言うけれども、一体その人間性というのは、どうしたら本当の人間性に立ち戻ることが、また展開していくことができるか。

私は、

「人間の原点に帰れ」

というわけで、「ひと」というのは「霊が止(とど)まる」というのを

「霊止(ひと)」

という。「霊が止まる」と書いて「霊止（ひと）」という。これは辞典の「大言海」に出ている。神霊の止まっているのを「ひと」というので、神霊が止まってなければ「ひと」ではない。だから、

「霊止（ひと）に帰れ」

という。神霊が止（とど）まっていないのは本当は人間ではないと。

ゲーテが、

「初めに行為あり」

と言いました。「初めに言葉（ことば）あり」ではないと。神さまは、行為と言葉が分けることのできない世界です。本当は言と行を分ける必要はない。

「初めに言あり」

だっていい。発しては言葉となり、動いては行為となるということが自在である。言ったことを、それから後で行為しましょうなんて、二段構えではない。口に出れば言葉となり、手足に出れば行為となるということが一つのことなんです。根源は一つ。そういう自覚がはっきりしてない。だから、なにか二つのことだと思っている。二つではない。一つなんです。

これが霊の世界、魂の世界です。ここに霊がはっきりないから、神霊的なものが来てないから、これが空言になって、実言でない。実言は必ず実現する。現ずる。だから、実言は実現といって、「行」の代りに「現」と言ったってかまわない。ぜひともそういった自覚を持っていただきたい。

いろいろな問題が錯綜して恐ろしいところに向かっている。電車のシルバーシートに若いやつが坐っている。そういう現象をみても、日本はもう滅びに向っている。だれかれに滅ぼされるのではなくて、自ら墓穴を掘っているようなものです。実際情けない。そういった若者を育ててしまったことは教育者の責任なんです、小学校から大学に至るまで。やはり、捨身の体勢でなければ本当の教育の仕事はできないことをつくづく思います。その捨身は空元気ではダメなんで、これは本当に聖書のこの世界、聖霊の世界を身につけないかぎりはダメです。まぁ、いろいろな問題がありましても、結局はその力があるかどうか。だから、今日は特に「聖霊の力」と題したんです。

●キリストの原始の力

使徒行伝の2章。キリストは復活されて40日間、自在に現れておられた。それで、弟子たちは、キリストは十字架にかかってお終いかと思ったら、どっこいということに。そのことはもう既に予言しておられた。彼らは本当に受けとってない。キリストが地上におられたころの弟子どもなんてものはおよそ弟子の資格がない。キリストの言葉、行為を本当に受けとっていない。そのことはキリストも分かっている。彼らは躓くと。本当に御霊が

くるまでは、聖霊がくるまではダメなんだということをキリストは分かっている。だから、あんなに躓いたり転んだりしているペテロもなお、

「お前は、今に聖霊がきたら、私の言っていることやしたことがみんな分かるぞ」

と。それをちゃんと見通しておられた。何といったって、地上におけるキリストは本当に単独者です。あるいは孤独者と言ってもいい。信頼しているペテロ、ヨハネ、ヤコブ、あの三人も大事な時には眠っている。情けないしまつです。けれども、キリストは、みんなの自己中心の罪を全部引き受けるというのが彼の十字架であったわけですから。

「この十字架を通ったら、今度は祈って待ってろ」

と。使徒行伝1章に書いてあるとおりです。

「8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力（ちから）をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極（はて）にまで我が証人とならん」（使徒行伝1・8）

と。1章8節が極めて大事な言葉です。聖霊を受けたら、一番先に何とキリストは言われたかというと、

「力（デュナモス）を受けん」

と。聖霊を受けて、力のないような在り方をしたのでは、これは実証されないわけです。生活の中に、何かしらんけれども、本当のエネルギーが入ってくる。

私は大学で「ドイツの宗教史」をやっているけれども、ある程度まではみんな喜んで聞いているけれども、

「本当に私はその世界に飛び込もう」

というのが暁の星より少ない。東大にいたときでもそうです。もう今の青年に私は希望を持つことができない。

だから、特に呼び覚まされた人たちは、あなた方はもの凄い責任を担っている。また光栄を担っている。いい加減なことではないですよ、この信仰にぶつかったということは。一人びとりが本当に原始力になっていただかなくては。キリストの原始の力に。

手島さんのグループが

「原始福音」

ということを言ってますが、あの「原始福音」という言葉は、手島さんと私がほとんど期を同じうして言った言葉なんです。ただ、あちらで使っていたから、私はちょっと遠慮してしまったんだけれども。原始福音というのはいい言葉です、正直。

「ウル・エバンゲリウム」（原始福音）

これはダイスマンというパウロの有名な研究家が既に語っている言葉ですけれども。このアドルフ・ダイスマンの『パウロス』というのは素晴らしい本ですから、ドイツ語の分かる人は読んでごらんなさい。名著ですから。

●無者即無限無量者

この力です。まぁ、福音書をみて、本当にこれは文字ではない。キリストのもの凄い生命力が、言葉にまた行為に自在に展開している。キリストはその力をどこから受けたかというと、神さまから受けている。神なしには、キリストは無力者なんです。だから、私は言っているでしょ、

「無者」

だと。キリストは無者である。何者でもない。

「無者即無限無量者」

である。この無者即無限無量者ということは、私たちがこのキリストにぶつかって、そしてキリストから来るこの無限無量なるものを生活の上で本当に体験、体現していかなくては。

私は、あるときからもう楽しくてしょうがない。そういうわけだから。昔の中学校時代の、あるいは高等学校時代の私を知っている人はびっくりしてしまう。この30何年、こうやって集会を続けることのできるのも、おざなりにただやっているのではないのだから、不連続の連続でやっている。

「汝ら、力を受けん」

と。

「どうも、私はこの頃少し信仰がおかしくて、力がありません」

なんて、何をぬかすかと。どんなおかしい時でも必ず力がくる。こちら側の信仰とか、信念とか、そういうことでないから。信仰をひとつの信念と思ったらダメです。

「私は信仰も何もありません」

ということです。

あなた方の中に空気があるですか。空気はないでしょ。空気は外にあって、いつもこれを吸い込んでいる。いつも外からきているものを、あるいは包まれているこの空気を吸い込んでは生きている。自分の中に空気を貯えてあって、そいつを呼吸してますと誰か言いますか。何も貯えてない。我々は無空の世界なんだ。空気がなにもないんですよ。ところが、この空気を無償でもって吸っている。同じことなんです。

肉体は空気を吸っている。魂は「霊気」を吸わなくては。ところが、霊気を吸わないで生きたような顔しているんだから、みんなこれはダメなんだ。本当はある程度吸わされているのに、気がつかない。神さまの方では、信仰するとしないとにかかわらず、ちゃんと霊気は与えている。ところが、これを本当に受けとろうとしないから。

空気を受けとる窓はこの鼻だよな。肺。ところが、「霊気」を受けとる魂は、魂の肺とか、鼻の穴に当るのは何ですか。祈りです。

「魂の呼吸」

は「祈り」なんです。

●彼らみな聖霊に満たされ

だから、キリストが、

「お前たち、祈って待っていろ」

と。十日間、彼らは集結して祈っていた。弟子たちを中心に集結して。そうしたら、五旬節の日に、ペンテコステの日に――ユダヤでいうと、過越の祝いから数えて七週間の終った翌日ということになっている。レビ記にそのことが書いてある――その時に、

「1**五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、**

「奮迅（ふんじん）の風」とこの漢訳聖書には書いてある。「獅子奮迅」という言葉がある。素晴らしい。漢文の聖書はなかなか力強い言葉を使う。もの凄い勢いと速さを持ったところの風です。「風」といったって、風の如きものです。

にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止（とど）まる。

ここに「止まる」と書いてある。霊が止まったんですよ。まさにこれが、霊が止まった、さっきの「霊止（ひと）」なんです。あなた方はこれから、「ひと」という字は「人」と書かないで、「霊止（ひと）」

と書きなさいよ。画数はずっと多いよ。けれども、非常に自覚するにはいい。まぁ大変なことです。

4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦（ことくに）の言にて語りはじむ。

「グローサ」「異言」を語る。この異言は高次な異言だものだから、ガリラヤの漁夫たちがそこに載っているところの――東はメソポタミヤまである。地中海からメソポタミヤにわたる各方面からやって来ている連中の――それぞれの方言を語るという特別な現象が起きた。これは普通の神学者や牧師さんたちはそれが分からない。

いつかもお話したけれども、サンダーシングは、ある所でお話しようと思って、英語の通訳を頼んでいたところが、通訳が来ない。それで祈っていたら、英語が自分は知らないが、自分の思うことを英語でしゃべった。それと同じことです。

まぁ大変なわけです。それでキリストの福音を語った。だから、みんな驚いてしまったわけだな。

旧約聖書でもって、

17**「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。**

というのだけれども、すべての人が受けないです、これを。もう20世紀も末の世なんだけ

れども。すべての人が受ければ、世界は問題はなくなる。これは違ったと。

脊椎カリエスを癒された人がある。彼は、

「肉体がただ癒されたことがうれしいのではない。自分が本当に霊肉渾然とキリストの生命にあずかった。だから、誰が何と言おうと、これは証しせざるを得ないんだ」

と書いている。

この聖霊の世界は事実、自分が体験するまでは、これはいくら研究したってダメなんです。「について」はいくらでも語りますよ、牧師さんたちは。けれども、その中から本当に告白することができない。水のバプテスマをやっても実は、

「キリストは聖霊のバプテスマをなさるために来られた」

と、洗礼のヨハネが言っているとおりで、それができない。

●「なんぞ、我を迫害するか」

私は今日は、特に聖霊のバプテスマで一番鮮やかな人、パウロ、そこに焦点を置きたいと思う。パウロはヘブライの名は

「サウール」

という。ギリシアの名が

「パウロス」

になった。この人はもちろんユダヤ人中のユダヤ人、ベニヤミンの族という。ヘブル人中のヘブル人。小アジアのキリキヤのタルソに生まれて、そのお父さんのローマ市民権を譲り受けている。アテナイ、アレキサンドリア、タルソの三つは当時の文化都市であった。ギリシア文化を彼は、生まれつき頭もよかったとみえ、身につける。また、エルサレムでガマリエルの膝下でもってユダヤ的な律法、魂の世界の訓練を受けた。抜群の成績であったということを彼自身も言っている。そういう、ユダヤの精神とギリシアの文化的な面と両方を彼はそなえていた。もちろん、ユダヤ人として特にパリサイ派に属して、非常に律法については熱心で、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と彼が言っているとおり。

そうであるので、イエスが現れて、イエスを信じていた連中、即ち、ペンテコステを通してキリストに本当に属した連中を、

「これはけしからん。新興宗教だ」

というので、これに真っ向から反対していたところの急先鋒、造反の親玉みたいなんだ、パウロというのは。

そして、9章と22章と26章に証言してます。パウロの弁明というのは、エルサレムに囚

われた時の22章と、それから26章、これはアグリッパ王の前でまたパウロがものを言っている。特にこの22章のところ、

「3『**我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生まれしが、此の都にて育てられ、ガマリエルの足下にて先祖たちの律法の厳しき方に遵(したが)いて教えられ、今日の汝らのごとく神に対して熱心なる者なりき。**

「神に対して熱心」ですよ。これは

「神の熱心」

ではない。神に対してのいわゆる熱心というやつはパリサイになりやすい。

4**我この道を迫害し**

「この道」というのはキリストの道、

男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らしめしことは、5**大祭司も凡ての長老も我に就きて証するなり。**

そういう悪いやつで自分はあったと。殺人の共犯者だよ、パウロは。22章には特にそう書いてある。

我は彼等より兄弟たちへの書を受けて、ダマスコに寓(やど)り居る者どもを縛り、エルサレムに曳き来りて罰を受けしめんとて彼処にゆけり。6**往きてダマスコに近づきたるに、正午ごろ忽(たちま)ち大いなる光、天より出でて我を環(めぐ)り照らせり。**7**その時われ地に倒れ、かつ我に語りて「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」という声を聞き、**8**「主よ、なんじは誰ぞ」と答えしに「われは汝が迫害するナザレのイエスなり」と言い給えり。」（使徒行伝22・3～8）**

同じことが9章にも出てます。太陽の光よりももの凄い霊の光、霊光に撃たれた。霊撃されたわけだ。これは一番恐ろしい。電撃よりも。あの電撃作戦というのがあるけれども、キリストの霊撃作戦はそれよりもはるかに凄い。

「もうこの野郎はどうしても引っくり返さなければどうにもならん」

と。口でいくら説いたってダメなんだ、行為（タート）でいかなければ。それで、光でもって復活のキリストがまず撃ってしまった。これは大変なことです。本当にこのことをあなた方は冥想してごらん。ぶっ倒れてしまうから。いい加減な気持でみんな読んでいるけれどもね、大変な現実ですよ。こんなドラマはちょっとそこらにない。

「なんぞ、我を迫害するか！」

と来たです。キリストは、

「我を信ずる者を迫害するか」

なんて、そんな論理的なことを言わない。

「なんぞ、我を迫害するか！」

と。

「彼らを迫害することは自分を迫害するのと同じことだ」
と。
「あなたをちっとも迫害してませんよ。あなたの弟子どもをやっているんですよ」
なんて、すぐ理屈のやつはそういうことを言う。そんなことをもしパウロが答えたら、もうこのパウロは落第。そしたら、もう救われない。
今の若い人たちのものの考え方というのはみんなそれ式だね。無条件に降参することをしないんだ。無条件に降参する人が本当の世界に入る。もう私ははらわたが煮えくりかえるよな。まぁ電車に乗っても、その顔を見てくださいよ。みんな不平そうな顔していたり、くすっぶったような顔したり、勝手気ままなような顔してみたり。それは一体どこからきているかというと、
「結局、日本人は本当の宗教を持たないから」
なんです。ただ道徳なんていったって、「社会道徳」なんていくら並べてみたってダメです。魂の奥底がある変化を起こさないかぎり。それは生まれつき親切な人はありますよ、けれども、大体においてはダメです。

●我が選びの器

それで、パウロは、
「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」
と。全く参って、三日三晩、目が見えずものが言えず。しかし、彼はショックを得たから、目が見えずものが言えずというその三日間で、彼は本当に祈ったろうと思う。そして、どうですか。ちゃんと道がそなえてある。アナニヤという人にちゃんと示しが来ている。
「あのパウロというのが動けないでいるが、お前は行って助けてやってくれ」
と。ところが、アナニヤはパウロというのを既に評判で知っているから、
「とんでもない」
と。そのお示しに対してそう言ったわけです。
「あれはキリストを信ずる者を迫害しているとんでもないやつで、どうして私がそんなことができますか」
と言ったら、今度またキリストの声が、
「15**主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』**（使徒行伝9・15～16）
「苦難を受けざるを得ざるかを示さん」
なんだ、本当は。「デイ」（ねばならない）というギリシア語を使ってある。即ち、福音のために彼は苦難にあずかる。

「彼は異邦人に当時の世界、地中海の国々にこの福音を述べ伝える選びの器なり」と。さすがに、キリストはこの造反の親玉を引っくり返して、これを本当に神の器として使おうとなさったわけです。

このサウロがキリストに撃たれた。彼は本当に参った。文句なしに。第一に殉教したステパノ――7章に書いてある――そのステパノの殉教の姿も彼は見て知っている。なおいきり立っていたんです。ところが、そういうことになった。それで、

「彼はしばらく、アラビアに居た」

とかなんとか、それはどこまで事実だか知りませんけれども、とにかく祈っていた。そしてエルサレムに行って、使徒たちに会おうと思うんだけれども、それはとても、

「あれはとんでもないやつだ」

と言って、なかなか始めは会わしてくれないし、

「やっつけてしまえ」

というような一部の声もある。けれども、既にパウロの回心のことをつぶさに聞いていたところのバルナバというのが執り成しをして、そしてやっとパウロの本質が、その変向が、回心が分かった。それで彼は異邦伝道にたずさわることを他の使徒たちも認めることになるわけです。

●ペテロとピリポ

パウロの伝道のことを一々申すわけではありませんけれども、ところどころを開いていただきます。その前に、もちろん、ピリポとか、ペテロのことが出てます。ちょっと、ペテロのことに寄りましょう。使徒行伝9章32節、

「32**ペテロはあまねく四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、33彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床に臥し居るに遇う。34斯てペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。**

ペテロが跛者をキリストの名で立たせましたね。またここでは、アイネヤを8年の病から起こしてやった。そのあとには、タビタという女のことが書いてあって、それがなかなか実存のいい女性ですけれども、これが死んでしまったのをペテロが生き返らせた。

36**ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業と施済とをなせり。37彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。38ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・**

上衣を見せたり。40ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、かれ目を開き、ペテロを見て起反れり。41ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。42この事ヨツパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。」（使徒行伝9・32～42）

と。聖霊が使徒たちに臨んできたら、えらいことになってしまった。

その前の方にも書いてあるでしょ。使徒行伝9章22節、

「22**サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。」（使徒行伝9・22）**

と。ダマスコに反キリストの勢いをもって行ったやつが今度は逆に、本当にキリストの味方となってパウロは動きだした。

10章にいくと、コルネリオという人のことが書いてある。この百卒長が凄いですよ。信心深いんだが、これがペテロによってキリストの弟子に変えられてしまう。だから、ここらは読んでいると、楽しくてしょうがない。聖霊の働きがいかに素晴らしいかと。

ピリポも、宦官のカンダケを回心させてバプテスマを施して、そしたらその瞬間に彼は見えなくなってしまった。大変なやつですよ、このピリポというのは。

そういったような、各章にまるで次元の違ったことが、もの凄い立体的なドラマが展開されている。使徒行伝をどんな気持で一体、みんな読んでいるかとおもう。

●幕屋を皆さんが開けば

現象面はどうであろうとも、質的には同じことがこの私たちにおいて臨む。当時のキリストも、20世紀のキリストも、世の終りのキリストも、キリストには変わりない。御霊にも変わりない。キルケゴールが「同時性」と言ったけれども、同時性であると同時に同質性なんです。ところが、今のクリスチャンはみんなそういう受け方をしないただ

「聖書の研究」

とかいって、ただ

「意味がどうだこうだ」

と、そんなことを何年やったって同じことです。終いにはくたびれてしまう。

我々はくたびれるどころではない。回を重ねるたびに力が入ってくる。皆さんがもしそういうことでないなら、もういつでも私はこの集会を解散しようと思っている。また、そういう意味でなくても、皆さんが本当に今度は力を得ていけば、私はこれを解散して、そして、そこここで幕屋を皆さんが開けば、私はそこここに行って、代わり番こにお話に行く。応援に行く。そういう体勢に早くなりたいんです、もうここはやめて。どっちにしろやめることになる（笑）。ダメでも解散してしまうし、よくなればまた解散する。覚悟してくだ

さいよ、本当だから。中間のことはゆるさん。中間は一番わるい。そういうわけで、もう期限付きですからね、この集会は。京都でもどこでも私は出掛けて行きますから。そういうことでもって、皆さんは本当に背水の陣を敷いてやっていただかないと。

まぁ、私はこの御霊の世界から、いろんな世の中の現象を見ていると、もうはらわたが煮えくりかえるから、火のごとくに。学校だってそうだよ。もう私のことを聞かないなら、いい加減なところで放り出すから。自分で言ってはおかしいけれども、

「小池という校長には何かしらんけれども別な力がある」

ということは、言わず語らずのうちに認めているわけだよな。いわゆる論理ではどうにもならないということを。

あなた方は、みんなそれぞれの職場で、

「あいつは何かしらんけれども力がある。どういうことだろうな」

と。人をどうか助けてあげてください。結果はどうなってもいい。この人を助けようと思ったら、とにかくぶつけることです。誰にも彼にもということではない。祈ってあげようと思ったら、その人に本当に真剣に祈ってあげなさい。結果はどうなってもいいです。とにかく、一番根源のところから神の力を、キリストの力を現していかなければ。告白というのは、口で告白することばっかりではない。身体で告白していかなくては。

●われ救われん為に何をなすべきか

そういうことで、パウロは第一次伝道、第二次伝道、第三次伝道と、もの凄い勢いで展開している。彼が獄舎に捕らえられても、もの凄いことが起きているではないですか。使徒行伝16章、

「19**然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見て**

というのは、占いの霊がじゃまされたものだから、パウロはけしからんというわけで、

20**之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、**21**我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣(ならわし)を伝うるなり』**22**群衆も齊(ひと)しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞(しもと)にて打たしむ。**23**多く打ちてのち獄(ひとや)に入れ、**

これはパウロがコリント後書11章で言っているあの鞭打ちをすごくやられたわけだ。

獄守(ひとやもり)に固く守るべきことを命ず。24**獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、**

厳重なんだ。

桎(かせ)にてその足を締め置きたり。25**夜半(よなか)ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人(めしうど)ら聞きいたるに、**26**俄(にわか)に大なる地震おこりて**

これは霊震です。地震ではない。霊震が起こった。

牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。

えらいことが起きた。だから、このパウロとシラスの祈りがもの凄い祈りです。キリストがこれに応えたわけです。

27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』

ちっとも逃げやしないよと。

29獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』

「救われん為に何をなすべきか」という言葉が使徒行伝に多分、二回か三回出てます。

31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』」（使徒行伝16・19～31）

それでみんな引っくり返ってしまった。獄守は回心してしまった。この事実の前には参ってしまうわけです。

●我と父とは一つなり

皆さんもどうぞ、どういうことにぶつかってもいいから、もう恐れることなしに事実を、霊的な事実をもって示してください。そうすると、なおさら力が上からくる。それをブレーキかけていたら、いつまでたってもダメなんです。

「我を視よ」

とペテロが言ったでしょ。その「我」は

「わがうちなるキリスト」

ですから。もう、今のクリスチャンがみんな意気地なしでしょうがないよな。私なんか、およそ生まれつきの小池なんてものは意気地なしなんです。弱虫の意気地なしの泣き虫。ところが、何だかしらんけれども、こういうことになってしまった。それはやはり、いわゆる信仰ではないからです。１９５０年に聖霊を私ははっきり受けましたから。

だから、このパウロがどれほど御霊の器であるかということは、彼の書簡をみてもはっきりする。彼の書簡を見たら、これは本当に聖霊中心と言ってもいいくらい。パウロにとっては、神を信ずるということと、キリストを信ずること、御霊を受けとるということは、これは一つなんです。三位一体とか何とか、

「三位一体はどうのこうの」

なんて、そんなことを言う必要はない。神信仰とキリスト信仰と聖霊信仰が一つなんです。キリストは「父」と一つです。父なる神といつも一つ。懐の中に入っているようなひとです。

「我と父とは一つなり」

と。「一つなり」ということは、キリストにとっては父が一切なんです。キリストにとって父は、神さまは
「全(すべ)て」（アッレス）
です。自分は
「無」（ニッヒツ）。
だから、
「無は全」（ニッヒツ　イスト　アッレス）
です。
「全か無か」（オール　オア　ナッシング）
ではない。
「無は全」（ナッシング　イズ　オール）。
「自分は何ものでもありません。あなたが一切です」
と。百％にその中に入ってしまっているから。もうその中に溶け込んでしまっている。
「なんじの意志を成してください。私の意(こころ)ではありません。どうぞ、私をお使いください」
と。絶対服従ですよ。日本の昔の軍隊がなぜ強かったかというと、上官の命令に絶対服従して突貫したから強かった。キリストは神さまの命令に絶対服従で――服従というのは屈従ではない。信頼している。相手は無限無量者だから――無限無量者に信頼したら、これは無限無量な質が入ってくるではないですか。だから、キリストは神さまと同質なんだ。同質になる。
　アタナシウスが、
「キリストは神と同質である」
と言った。この議論が勝ったんです。
「神に似ているどころのさわぎではない。同質なんだ」
と。アリウス派とアタナシウス派の争いはそれだったわけです。キリスト教の神学の方ではあれは大事なところです。
　今度は、クリスチャンは「同質」ということを言わないんだよ、みんな。
「我々は罪びとである」
と言う。それは罪びとに相違ないですよ。私なんてのはしょがない野郎です。プロテスタントは、
「私は罪びとです。罪を赦してください。十字架を仰ぎます」
と、そんなことを繰り返している。そういうのは気休め信仰というんだ。そんなことは、「罪びと」なんてのは決まっているんだ。いつまでたったって始まらない。そんなものをどうしようとしたって、百年河清を待つがごとし。これはダメなんだから、そんなものは問題

にしない。

●「神―キリスト―我」の三重丸

だから、このキリストの中に自分を入れる。これは十字架を通して入る。即ち、十字架は私を全部引き受けてくださった。キリストの十字架は――私は何回言うかしらん――全部引き受けた。

「お前の自我はみんなここに十字架に付けてしまった。私と一緒に付けてしまったから、もう自分を問題にするな」

と。

「こんな野郎は」

と言って自分をけなすやつがむしろいいんだと。これは西郷南洲もそのことを言っている。

「自分を愛することは罪の最大なものだ」

と。南洲は聖書を読んだかもしれないくらいだ。自己愛は己を惜しむ。自己弁護、自己愛。これはみんな罪の最大なるもの。もはや、そんな相対的な我なんてのは問題ではない。相対というものはいくつあったって、これは無限大に対してはゼロに等しいんですよ。相対的な価値を――近頃は「価値判断」だとか、何とかの価値とか、一生懸命で言っているね、「価値、価値」と――一生懸命で価値を問題にしている。私はおかしくてしょうがない。相対的な価値を問題にしている。そんなものはみんな無価値なんです。無限大の価値に対しては、そんなものは価値に値しない。本当に自分を投げ出してごらん。もの凄いことになるから。そんな相対的なものを、

「価値があるのないの」

なんてよしましょう。そうしたら、無限無量なるものが入ってくる。

だから、十字架で自分がすっ飛ばされて、

「もはや、われ生くるにあらず。御霊のキリスト、キリストの霊が私の中に来ました」

と。キリストの霊が来たから、これは同質なんです。そのことは一々言わないけれども、パウロの書簡に散々書いてある。

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と。

「御霊を宿しているあなた方は活けるキリストの宮である。我々は活ける神殿である」

とパウロは言っている。

「私はキリストの中に、キリストは私の中に」

と散々言っている。だから、こういう三重丸（三重の内接円）で表せる。三重丸は何を意味するかと。これは

「〃神・キリスト・我〃　の三重丸」
ということ。これは聖霊が全部この中に浸透している。

「神は一切のものに超在し、一切のものに貫在し、一切のものに内在する」

とパウロは言った。その神はもちろん、その現象においてみな御霊をもっている。そのところでは、キリストの在り方と我々とは質的には同じことになる。ただ、キリストにおいては罪はない。我々においては罪がある。現実には相対的な我々には罪があるけれども、そんなものは気にしなくていいから。

「キリストの中にあれば、御霊が来ていれば、どんなに自分が〃マイナス99〃のような人間であっても、この〃1〃を、〃御霊の1〃をいかんせん」

と。これ（御霊の1）が勝つんです。こんなもの（マイナス99）は滅ぼしてしまう。いいですか。それだけの自信をもってくださいよ、自信ならざる自信を。聖霊が来なかったら、そういうことは言えない。御霊は何ものとも代えることができません。自分の信仰だとか何とか、

「まだ私の信仰は弱いの、強いの」

なんて、そんなことを問題にする必要は全然ないんです。

●御霊のバプテスマ

その御霊のバプテスマのことは19章、

1 斯（かく）てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』

ヨハネというのは洗礼のヨハネですから、悔改めのバプテスマです。水のバプテスマ。水に浸ることです。浸水。キリストもヨルダンの河に浸水した。けれども、キリストは洗礼のヨハネに水に浸されたけれども、同時に彼は霊に浸されてしまった。

「聖霊が鳩のごとく彼の上に臨んできた」

と書いてあるでしょ。だから、悔改めのバプテスマだけではダメなんです、御霊を受けるバプテスマでなければ。

4パウロ言う『ヨハネは悔改（くいあらため）のバプテスマを授けて己に後（おく）れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』

「信ずる」とは「受けとる」こと。

5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按（お）きしとき、

按手をした。

聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7この人々は凡て十二人ほどなり。」（使徒行伝19・1～7）

「異言とか預言とかが出なければ聖霊を受けたということにはならない」とは言いませんよ。この場合は、異言や預言が出た。異言が出なくたっていいですよ。ただし、何かしらんけれども、その人に必ず何か現象が起きる。

「何かこれはちがうな」ということがはっきりと感ずる。「賜物（たまもの）」「カリスマータ」の面はいろいろなものでよろしい。異言であろうと預言であろうと神癒の力であろうと。

知的な人は大いに知的なもので霊知的なことになっていくよ、霊的な知恵に。グノーシスばっかりでなくて、エピグノーシスの世界に。ピアノを弾いていれば今度は、ピアノが凄くなっていく。作曲の面でももの凄いことになっていく。文学でも何でもいいよ。とにかく、何をしていても、医術の方でも、医者の方でも、会社の方の仕事であろうと、何をしていても必ずそこに創造的な力が働いてくる。何をやっていても、本当に創造力が湧いてくる。

神さまの御霊の力は創造的な力を持っている。創造力、生命力を。創造力が知情意の面に自在に働きます。知の面でも、情の面でも、意志の面でも。とにかく、何か根源的な生命の世界に入りますから、創造的にならざるをえない。

日本になぜ偉大な芸術が生まれないかというと、これがないから。全然生まれないとは言いませんよ、素晴らしい人もあります。それはやはりその世界で、とにかく仏教であろうと何であろうと、その究極のところに達しているからです。第一流の人たちはみんなそうです。第一流の人たちはみんな、ある意味においてこの霊的な次元に入っている。

●御霊の生命の歓喜の世界

茶道の達人の有名な話がある。茶道の達人が剣道の相当なやつをやっつけてしまった。茶道の極意に入って、その人が瞑目して大刀をかざしたら、相手の剣客が

「参りました！」

と言った。即ち、剣を知らないところの茶道のお師匠さんが剣豪をやっつける。いわゆる剣豪ではダメなんだ。宮本武蔵までいけばいいが。とにかく、宮本武蔵でなくとも、たとえば、剣道をやってる人がこの信仰に入ればもの凄くなる。王にも負けないホームランバッターにもなれるよ。ランニングだって何だって、鳥のように跳んでしまうかもしれない。

まぁ、この御霊の世界は本当に生命の歓喜の世界で、どのような事態にぶつかっても、決して行き詰まらない。恋愛なら、本当にもの凄い恋愛をして、あの人のためには生命も捨ててもよろしいという、それだけの恋愛をしてくださいよ。そうすれば、結婚までいくから。

「まず、どうかな？」

なんて、いろんな条件を考えているうちはいつまでたってもダメ。結婚で一番大事なことは、お互いに

「その人のためには」

という、生命を捨てるだけの――

「**愛は死よりも強し**」

というじゃないか――

「たとえばこうなったらどうなるだろうか、その先はどうなるだろうか」

と、そんなことを考えたら、たとえ結婚しても本当の幸いにはならない。

とにかく、そういったもの凄い気合は――気合という言葉で言っても――これは御霊の世界においてこそ本当の気合です。もうこの20世紀のこれからは正直、いろんな意味において、おもしろからざる現象が起きてきますよ、各方面に。そこでゴタゴタすることはないですから。もう相対界の価値判断なんてものは飛び越えた世界に、超価値の世界に、超相対価値の世界に、絶対価値の世界に、超イデオロギーの世界に、本当に魂をすえていかなければ。そうしたらば、どこでぶっ倒れてもハレルヤです。決してそれでその人は終らない。それだけの信を持たなかったらつまらん。

一体、そこらの教会で何をやっているかと、正直、言いたいわけですよ。今のキリスト教も仏教もなぜ力がなくなったかというと、本当の如来の世界に本当に入ってないし、本当にキリストの世界に――この使徒たちの、ペンテコステを経たパウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブのような次元に――入っていないからです。

新約聖書の次元はそのような次元で、そこから証言されている言葉であるから、御霊を受けないで新約聖書は読めっこないんです、どんなに研究したって。あなた方はそれだけの自信を持ってくださいよ。註解書なんかいらないんだ。本当にこれを身読して、からだで読んで、そして――私なんかまだ読み方が足りないんですけれども、ことに頭がわるいから――

「もう、新約聖書は私は要りません。ピリピ書には、こう、こういうことがあります」

と、みんなそらでもって中味が、大事な文句がすらすら出てくるくらいになる。少しキチガイになってくだいよ、みんな。

「私はひとつピリピ書を暗記してやろう」

と。

●聖霊の力

私は見ると、まだまだあなた方は迫力が足りない。ダメだ。こんなことをやっていたら、私はもう本当に解散してしまうから。いいかね。私はあなた方を本当に愛するから、激し

いことを言うんだ。土曜の晩でも何でもいいから、二、三人でも集まってやってごらん。そうすると力が出てくるから。とにかく、もう準備はいらん。準備は御霊をもって祈って、あとはやっていく。いいですか。現実に、

「初めに行為あり」

と、もはや行為していかなければ。行為が本当の告白であるということを改めて認識して、自覚していただかないといかん。御霊の力で行くところに絶対に行き詰まりはないですから。行き詰まったと思ったら、もの凄く開示していきますから。

「まだ自分はどうも少し準備が足りない。どうのこうの」

とか、そんな相対的価値を問題にしないでくださいよ。ということは、勝手な、何ていいますかね、「暴虎馮河（ぼうこひょうが）の勇」を出せということではないけれども。そのある場において本当に御霊の祈りをもっていけば、必ず神さまはなしてくださる。小さく始めるんです。小さく。知らないまに、そこに本ものが動いていく。

私は今日は実は、もう少し中味的なことを話そうと思ったんだけれども、話がそういうことになってしまった。パウロの書簡は祈祷会の方でいたしましょう。使徒行伝におけるところのパウロ、ヨハネ、ペテロまたピリポという連中がいかに聖霊において動いていたか。そして本当に証をして行ったか。これは一々ここでもって今、読まなくても、皆さんがもう既に読んでいらっしゃると思うから、当たりませんけれども。

パウロはそのようにして、ついにローマにまで行った。ちょうどキリストが十字架にかかる前に、ペテロが、

「そんなことはあらざれ」

と言った時に、

「サタンよ、退け」

と言ったように、パウロは、

「もし行けば、捕らえられますよ」

と言われたときに、

「いや、聖霊は行けというから、たとえ捕らえられてもいいんだ」

と言って、彼は進んで行った。そして、エルサレムで案の定、捕らえられた。かえって、それでもって彼はローマに行くことができた。ローマでもって一応の伝道をして、第三次伝道あたりでは大いに書簡も書いた。最後には、更にイスパニヤまで行こうと思ったが、あのネロという悪い皇帝がキリスト教を迫害して、パウロもペテロもおそらくネロの統治下において殉教の死を遂げたらしい。どんなに牢屋に囚（とら）えられても、エペソ、ピリピ、コロサイの書簡が表しているように、彼は非常に盛んなに意志をもって、牢屋に囚えられたことでひとつもくすぶってない。

「神の言は囚えられていないぞ。お前たち、この福音を喜べ」

と。本当に盛んなるかなパウロ。もう書簡の諸所方々で彼は絶叫しているでしょ。

「我は福音を恥じとせず。この福音はユダヤ人をはじめギリシア人にもすべて信ずる者に救いを得させる神の力である」

と。この聖霊の力。力ある聖霊。力の内容はいろいろであります。

●敵を愛せよ

そして、その聖霊の力は一体、どこから来るか。もちろん、聖霊の力はキリストから来ます。キリストに宿っていたところのあの愛の力です。愛とは敵をも救いあげることを愛という。

「敵を愛せよ」

ということをキリストは本当によく言ってくださった。

「『敵を愛せよ』という言葉はキリストの言葉だから、まぁまぁ仕方がない」

なんてみんな思っている。そうじゃないんだ。キリストがもし

「敵を愛せよ」

と言わなかったらば、キリストの愛は全きを得なかった。敵を救い上げるんですから、愛するというのは。ただ感情で愛するのではないから。敵をも救い上げて、敵が、相手が

「これは参った！」

と言う。

戦争でも、相手はもうひと突きすれば死んでしまう。ところが、その敵を突かないで、背負いあげて、そして野戦病院に連れていく。これは本当の武士道だよな。その武士道的精神を表した絵を私は小さい時に見て、それがいつまでも印象に残っています。本当に相手が

「参った！」

というのが、相手を救い上げる力なんです。

ですから、皆さんもいろんなことにでっくわして、これは御霊がくるとできるんだから。聖霊はもの凄い力強い愛だから。

「愛は一切に勝つ」

んです。

何とか闘争なんてしょっちゅう争っているね。争いばっかりやっている。ダメだよ。要するに、本当の信頼関係に、本当の人間性に立たないから。

「人間性、人間性」

というけれども、人間性は一体どこにおいて本ものになるかということをたずねてないから。神・仏の世界に自分の魂が連ならないで、人間性が本ものになるかというんですよ。人間性くらいまでしか言えない。

「宗教的情緒」

くらいまでしか言えない。アクセサリーみたいなことを言っている。大胆にそのことをはっきり言うやつがいないから、私は言ったんです。

そういう御霊の力。これはキリストの愛の力がこの御霊の中にある。

「私の生命はその他にありません。聖霊の他に私の生命はありません」

と。

ダンテなんていう詩人がなぜ、こんなにもの凄い力を持っていたかというと、彼はやはりそういった霊の人であった。その点では、ダンテの力強さはゲーテ以上です。

ゲーテさんも凄いですよ。

「神―自然―我」

というものの融合の世界を彼は身に帯していたから凄い。凄いけれども、キリストが結晶体みたいに、キリストが中心になっているようなのには、やはりどこかかなわないところがある。だから、ゲーテ自身が正直言ったんだ、死ぬ二週間前に。

「私はキリストの前に無条件に頭を下げる」

と。ナポレオンもセントヘレナで最後にキリストに参った。

「福音書は文字ではなかった。これは活ける何ものかであった」

と。福音書にぶつかって、その生命力、その生き物みたいなものにナポレオンは最後に驚いた。どんな英雄であろうとも、キリストの前にはかなわんです

だから、皆さんもこの力で、どんな現実にぶつかっても、もう絶対にへこたれないで突破していく。包んでいく。本当ですよ。そして、どうぞひとつ地道に証をして行ってください。

「もう少し勉強してから。もう少し武蔵野で先生の話を聞いてから」

なんて、もういいよ。たくさんだ。だから、もう始めてください。このペンテコステをもって君たちがそれに取りかかるように、私は今日その宣言しようと思ってやっているんだ、正直。

まだ奥さんがいい加減だったら、まず奥さんから始めてくれ。奥さんでも子どもでもいいから。私も落第だけれどもね。子どもはなかなか私の言うことを聞かない。

「お父さんの言うことは分かっている。台詞（せりふ）まで知っているよ」

なんて。まぁ、あんなことを言っているが、私が天界に行ってから気がつくから。それでまぁいい、とにかく気がつけば。別にわるいやつではないけれどもね。なかなかここに入ってこない。せっかくここでやっているのに、もったいないはなしだよ。

そういうわけです。終ります。